The Effects of Non-Native Speaker/Non-Native Speaker Interactions on Negotiation of Meaning and Development of Question Formation in the Second Language Classroom: Distribution of Proficiency Levels Among Pairs

教科・領域教育専攻
言語系コース（英語）
濵　中　直　宏

１　研究の背景

第２言語を学習する教室環境においては，学習者は自らの能力を高めるために第２言語で意思疎通を行う機会を十分に持つことが必要であると言われている。多くの英語教師は，コミュニケーションの機会を十分に設定するためにペアワークを取り入れている。ペアワークではインタラクションが発生する。このインタラクションが言語習得を促すと主張するものにインタラクション仮説 (Long, 1996) がある。学習者は，インタラクションを通して意味の交渉の機会を得る。そこで，理解可能なインプットを受け取り，理解可能な発話を試みる機会を得る。さらに，対話者からフィードバックを得ることで自分の発話の誤りに気づき，その誤りを訂正することができる，とされる。

これまで，第２言語学習におけるインタラクションの効果を示す研究がなされてきたが，実験では, 母語話者(NS)-非母語話者(NNS)というペアが調べられることが多かった。しかし，教室環境では, NS-NNS ペアで学習が行われる機会はほとんどなく, NNS-NNS ペアで学習が行われることが多い。そこで本実験を実施した。

２　研究の目的

本研究の目的は，第２言語として英語を学習する教室環境における，中学校の生徒同士のペアワークが，彼らの第２言語習得にどのような効果をもたらすかを調べることである。特に疑問形習得における発達段階 (Pienemann, Johnston, & Brindley, 1988) の指標を用いてペアの組み合わせを行い，疑問形習得と疑問形の使用に対する効果について明らかにする。

３　研究の方法

実験は，平成１５年４月下旬から７月上旬にかけて１１週間で実施した。

実験の参加者は，公立中学校３年生３２名である。疑問形習得の発達段階に基づいて，１－３段階を Low レベル，４－５段階を High レベルとし，参加者を High-High，High-Low，Low-Low の３種類のペアに分類した。参加者は，このペアで事前テスト，事後テスト１，事後テスト２を受けた。また，事前テスト後に相手を変えて，処遇１－３を受けた。テストでは間違い探しタスクを，処遇では絵描きタスクを行った。テストは一人当たり１０分，処遇は１５分で行った。タスクの際の参加者の発話は全てテープレコーダーで録音した。

疑問形習得の発達段階の指標を用い，参加者の発話をコード化し分析を行った。テストの発話にもとづいて，参加者の発達段階の推移と使用した疑問形の種類を分析した。また，発達段階の推移に特徴のあるペアに関して，インプット，アウトプット，意味の交渉の点から処遇の発話を分析した。

４　結果と考察

発達段階の推移に関しては，High 学習者の

場合，相手の発達段階に関係なく発達段階を向上させその段階を保持したものはいなかった。より上の段階の疑問形のインプットを相手から受け取る機会がなかったことが原因として考えられる。一方，Low 学習者の場合，High-Low，Low-Low ペアとも数名ずつより上の段階に向上し保持したが，その人数の差は統計的には有意な差ではなかった。High-Low ペアの場合，High 学習者が Low 学習者に対して，あらかじめ簡単な言い方に修正して発話を行ったため，Low 学習者は，自分の発達段階よりも上の発達段階の疑問形のインプットを受け取れなかったと考えられる。Low-Low ペアの場合，同じ Low 学習者のペアの中に，発達段階に差があるペアがあり，自分の発達段階よりも上の発達段階のインプットを受けることができる学習者がいたために，発達段階を向上保持する学習者が出たと考えられる。

使用した疑問形の種類に関しては，High 学習者の場合，High-Low ペアでは，事後テスト１で，より低い発達段階の疑問形の使用が多く見られた。しかし，この変化は事後テスト２では見られなかった。一方，Low 学習者は，事後テスト 2 において，High-Low ペアでは，高い段階の発話が多く見られ，Low-Low ペアでは，低い段階の発話が多く見られた。

処遇の分析に関して，インプットの点では，より高い段階の疑問形のインプットを Low 学習者が受け取れるかどうかが Low 学習者の高い発達段階の疑問形の習得に影響を与えたと考察された。アウトプットの点では，High 学習者が処遇で高い発話をし続けるか否かが，その後のテストでの発話に影響を与えることが示唆された。意味の交渉に関しては，本実験では疑問形の習得に対して影響が見られなかったが，相手から要求されて行ったアウトプット (pushed output) のタイプが，習得に対して影響を与えたと考察された。

５　教育的示唆

疑問形の発達段階に基づくペアの組み方は，学習者の疑問形の習得に効果的であり，教師はそれぞれの学習者の発達段階をふまえて適切な指導を行うことができると思われる。

また，疑問形習得には自分の発達段階よりも上の発達段階の疑問形のインプットを受けることが必要であるが，High 学習者の場合，相手の発話からより上の段階のインプットを受け取ることは難しい。そこで，ペアワークを行う際に，高い段階のインプットを含んだモデルスクリプトを与えることが有効であると考えられる。

間違い探しタスクと絵描きタスクは，ともにどの発達段階の学習者にとっても，疑問形の習得を促すことに効果的である。

６　今後の課題

本研究では，参加者の数が少なく，グループ間のペアの数のバランスが取れなかったので，ペアの組み方が疑問形習得に与える影響について一般化するのは難しい。よって，さらに多くの参加者に対して実験を行うことが求められる。また，発達段階６を含む参加者を対象に実験を行うこと，High，Low の基準ではなく，発達段階ごとでペアの組み合わせを考えていくことが必要になってくると考えられる。

今後も，教室環境においてはペアワークが多く取り入れられていくと思われる。そのため，継続的に実験を行い，その効果を明らかにしていくことが必要である。より効果的なペアの組み方について考察することは，第２言語習得への影響を議論するうえで重要であると考える。

指　導　　酒　井　英　樹